

猿橋えんきょうから溪川たにがわへドブーン

弥五右衛門親子に別れた国定忠治は、信州を立て甲州へ入って参りました。猿橋えんきょうのかたわら鳥沢とりざわというところに斧右衛門おのえもんという、今でこそ立派な貸元ですが、元は長い間上州路を旅人たびじんで歩いて、国定村へ来て忠治のところへ厄介やくがいになっていたことがございます。ここを訪ねますと、斧右衛門喜んで下へも置かないよう、よく世話をしてくれます。長い間無理をしたのが打って出たものか、この頃忠治は具合が悪く、医者よ薬よと斧右衛門が心配をしてくれます。ある日の暮れ方、草履ぞうりばきで植込みの間をぶらりぶらり歩いてみると、向こうの障子の中で、

○「おい困るじゃあねえか斧右衛門さん、今日もまた一寸逃れを聞いちやあ帰れけえねえ。白い黒いの形かたのついた返事を聞かしてくれ」

斧「相すみませぬ、なにしろわっしは忠治さんには恩がございます」

○「おめえが国定忠治に恩のあるのは知っているよ。こうやって世話をしなされるのも義理があるから、よんどころなく世話をしているんだくらいのこととは知っているよ。おめえさんが気の毒だから踏ふん込んで召し捕らねえんだ、さもなきやあとうに黙って踏ん込んで忠治を召し捕ってしまふよ。ねえ、

そうなるとおめえさんはかくま匿つて置いた罪は軽くねえよ、遠島えんとうぐらいのお処刑しづぎだせ、それじゃあ気の毒だから膝を抱きに來たんだ、この道理がわからねえか」

斧「よくわかっております」

○「白い黒いの形のついた返事を聞いて行こうじゃあねえか」

斧「どうでしょう、来月の八日まで待つて下さいまし」

○「八日にどうするんだ」

斧「来月の八日がこの村の薬師様の縁日えんにちです」

○「うむ」

斧「年に一ぺんずつ、祭礼でいやあ本祭礼だ、いろいろ催しがあつて大変賑やかな縁日、来月はちようど年一ぺんの大縁日なんです」

○「うむ」

斧「話に聞くと江戸から茶番師が來て茶番があるといひますから、そこへ忠治を引つ張り出します、薬師様の境内でお手当をなすつて下さい、わっしの家で繩をかけるのだけは勘弁して頂きてえ」

○「わかった、来月の八日だね」

斧「そうです」

○「刻限は何刻だなんどき」

斧「さあ昼過ぎの八つから七つの間と思つていて下さい」

昼すぎの八つといえは午後二時、七つといえは四時です。

○「ちようどいいや、じゃあそのことをさつそく小松屋さんと山形屋さんへ知らせよう」

斧「どうぞ小松屋鶴吉さんにも、山形屋藤蔵さんにもよろしく願います」

○「うむ、二人もきつと喜ぶに違えねえ、じゃあごめんなさい」

障子越しに聞いていた忠治がびつくりした。

忠「ああ、それじゃあ小松屋と山形屋が案の定じようおのれの悪いことを考かんえねえで、おれを怨うらみやあがつたな。おれがここにいろのかぎつけやあがつて、遠回しに斧右衛門を抱き込んで、おれをふん縛るつもりだな、斧右衛門に何か考かんえがあるんだらう」

聞いて聞かないふりをして黙つていた。何か話があるだらうと思うと斧右衛門から何も話わがございませぬ。翌月の八日、昼飯を食べてしまふと、

斧「さて親分」

忠「なんだ」

斧「樂師様が今日は大縁日です」

忠「そうだってな」

斧「江戸から茶番師が来るそうです」

忠「そんなことも聞いたよ」

斧「どうです、ご参詣ながら茶番の一幕も見て来ませんか、茶番でも見てわつと笑うと気が晴れま  
すぜ」

心の中で忠治、ああ人は頼りにならないものだ、それじゃあ斧右衛門め、おれの身体をふん縛らせ  
るつもりだなと思つた。

忠「よそうよ、混雑の中へ行きたくねえ」

斧「そう言わねえでおいでなさい、わつしがご案内します」

どうなるものか、いよいよという時を百年日と諦めてしまおう、こう覚悟をしたから、

忠「よし、それじゃあ一緒に行こう」

支度をする。音蔵おとぞうに源松げんまつという二人の若者を連れて四人で出掛けました。歩く道ながらも汕断はご

ざいませぬ、忠治は始終斧右衛門を右の方へ置く、いよいよという時に抜き打ちに叩つ斬つてしまふつもり。やがて樂師様の境内へ来る、年に一度の大縁日でございますからたいそうな人出で賑やか、お賽銭さいせんを上げ、お線香を上げてお参詣をする。にわかごしらえの舞台で江戸から来た仁輪にわか加師かしの茶番があるというので、その前はいつばいで身動きもできません、皆幕の開くのを待つております。

斧「一幕見て行きましょう」

忠「うむ」

間もなくかちかちと拍子木が鳴る、幕が開く、仮名手本忠臣蔵かなでほんちゆうしんくらのうち七段目の茶屋場の仁輪にわか加かです。忠治はその方を見ている、油断をうかがつておいて斧右衛門がぐいと右の手を挙げたのが合図とみえます。

○「国定忠治、御用だつ」

と大きな声でどなった奴がある。

忠「来たな」

と思うから忠治、ぱつと後ろへさがつて、小松五郎の柄へ手を掛けるとたんに、

○「神妙にしる、御用だつ」

ばらばらばらつと周圀まわりを取り巻いたのは、見物の中にまじっていた小松屋山形屋の若い者五六十人。忠「斧右衛門、よくもおれを欺だましやあがつたな、この返礼はきつとするからそう思え」どなりながら鞆を払った義兼の一刀、寄らば斬ろうと構えた。忠治の腕のできるのを知っておりますから、周圀は取り巻いているがだれも近づく者もない。

○「御用御用」

と遠巻きにしているばかり、忠治はそのうちに一方の血路けつろを開いて裏門の方へ逃げて行く。

△「それ逃げた、待てーっ」

とばらばらばらばら追って来る。忠治は弦つるを放れた矢のように甲州街道を猿橋えんきょうのところまで逃げて来た。

×「しめたしめた」

と追って来る奴がどなった。ひよいと見ると橋の向こうに小松屋山形屋の若い者が三十人ばかりずっと網を張っていた。

忠「しまった」

と思ったのは、ちょうど橋の上、追って来る奴と、向こうに網を張っていた奴とで、忠治を橋の上

へ追い詰めて置いて、両の袂たもとをずっと立て切ってしまったている。日本三奇橋ききょうの一つ、馬入川ばにゅうがわの川上、桂川かつらがわという溪川たにがわへ架かかっているのが猿橋でございます。思えば昔よくああいう橋を架けたもので、橋の長さが六十七間、橋から水の面つらまで十九丈八尺、その昔猿が手と手を繋ぎ合わせてあの溪川を渡った、それを見て人間が架けた、猿に教えられて架けたから、それを名にして猿橋というのだそうです。その橋の中央まんなかに立った忠治、両の橋の袂からはばらばらばら砂利を投げながら、忠治をだんだん詰めて来る。真ん中に突つ立つた忠治は、

忠「もう仕方がないこの溪川へ飛び込もう」と覚悟をした。手早く衣服きものを脱ぎ、小松五郎の長脇差を帯で背中へ背負い、欄干へ手がかかると、身を躍おどらしてどぶーんと溪川たにがわへ飛び込んだ。

○「それ飛び込んだ、川下へ手当をしろ、川下へ手当をしろ」

大きな声でどなったのは、急流ですから飛び込めば必ず鞆まりを蹴り返すように川下へ押し流されて行く。そこでどんどん川下へ来て、百姓家しやうやから網を引き上げて来てぐーっと張り回してしまった。

ところが忠治の身体が川下へ流れて来ない、これは来ないわけです。というのは、烏沢くぬさちの糸吉いときちという盗賊かみやくにんがいて、上役人かみやくにんに追われて猿橋から飛び込んだときに、土地の人間だからよく心得ている、流れに押し流されようとするのを岩角へ取りついて、岩伝かみいに上へ上へとのぼって、猿橋の川上天神てんじんガ

岳の麓へ来て逃げてしまった。上役人は川下へ押し流されて来るだろうと思うから下の方へ手当をしていたからついに取り逃がしてしまいました。忠治はこの鳥沢の叅吉の話を聞いて知っていた、話はむだに聞いて置くものではございませぬ、何が役に立つかわからないものです。危うく押し流されようとしたのを忠治、一生懸命は恐ろしいもので岩に取りついて、その岩を蟹のようにはって伝わり伝つて来た天神ガ岳の麓、運よくここを免れました。

## 石川五右衛門の子孫かい

猿橋の川上、天神ガ岳の麓へ上がって見ると、この辺は水も浅く、流れもゆるくなっております。ほっと息をついた忠治、小笹を掻き分けて上がって行く。どこを見ても人がいない、胸のあたりまで生えている笹を踏み分けて行くうちに、山また山に入ってしまった。すると山の谷間と思うようなところからぽーっと煙が昇っている。

「ああ炭焼き小屋だな」と思った。その煙を目的にだんだん行くと一軒の掘っ建て小屋がある。門口へ立って見ると、囲炉裏へ火を焚いて、鍋をかけて何か煮ているのは年頃二十五六、色の浅黒い両眼の